連載

チャレンジする Someone NEWS ～挑戦者の履歴書

第⑱回

チーバくん（千葉県マスコットキャラクター）
――分かりやすい地域キャラクターのヒーロー

一般社団法人 洸楓座　代表理事　佐藤 建吉

図1：チーバくん【＊】

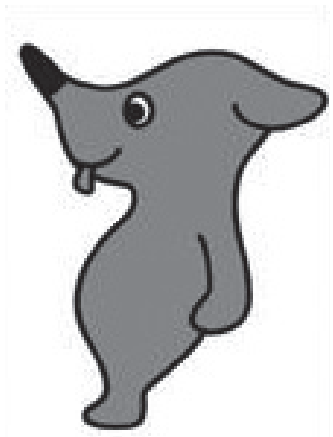

図2：千葉県地図

▼地域キャラクター

ある地域のマスコットキャラクターは、ご当地キャラクター（略してご当地キャラ）とも呼ばれ、彦根市の「ひこにゃん」を代表として人気である。熊本県の「くまモン」は、営業部長&しあわせ部長の役職も委嘱されているという。こうして、ご当地キャラは人格さえあるものも登場しているが、地域をPRする役割と使命を得てつくられ、その大きな貢献をしているものも多い。本稿では、「地域キャラター」と呼ぶことにする。

千葉県には「チーバくん」と呼ばれる地域キャラクターがある（いる）（**図1**）。これは、それ以外の地域キャラクターとは異なり、千葉県の地図（地形）に由来した2Dのイラストが原型であるが、ぬいぐるみとして3D化され人気となっている。チーバくんは、ぬいぐるみとして、動きをするので、しぐさもあり、見る視点により、様々なカタチとなり、2Dのイラストとしても、その結果、多くのバリエーションが出来ている。

生きた人間ではない「チーバくん」を、「挑戦者の履歴書」の副題をもつこのコラムで取り上げることは、例外的である。このコラムは、「アイウエオ順」で書いている。前回は「タ」で、今回は「チ」であるので、いろいろの理由があり、人物に代えて「チーバくん」とその関連話題を紹介することにする。

▼「チーバくん」とは

チーバくんは、正式には「千葉県マスコットキャラクター」という名称をもっている。そのプロフィールを、千葉県のホームページ「チーバくんの広場」【**註1**】では、「千葉県に住む不思議ないきもの」とされている。平成19年（2007年）1月11日生まれであるというから間もなく15歳になるが、歳は取らないのだろう。好奇心旺盛でいろいろなことに挑戦するのが大好きであるというから、本コラム〝チャレンジするSomeone NEWS〟にはある面では、合致する。

「チーバくん」のぬいぐるみは、赤い丸々とした短足巨頭で大きな目と鼻を持つ愛らしい生きものであり、子供たちの歓声を呼ぶ。筆者も、2015年12月、千葉県大多喜町の廃校小学校でのクリスマス・イベントに、「チーバくんのぬいぐるみ」を登場させたことがある。子供も大人も周知のマスコットで人気であった。

この「チーバくん」のデザインは、千葉県市川市出身の絵本作家・イラストレーターの坂崎千春氏（さかざき ちはる）による。同氏は、「SUICAのペンギン」の作者でもあり、動物を得意とするイラストレーターである【**註2**】。そのペンギンにも多くのバリエーションがあり、たくさんのグッズのキャラクターとして用いられている。

「チーバくん」は、当初、2010年のゆめ半島千葉国体・ゆめ半島千葉大会のPR用のマスコットキャラクターとして採用された。2007年1月11日が初出で、この日がチーバくんの誕生日となった【**註3**】。その後、2010年10月7日に森田健作知事が千葉県のマスコットにすることを発表した。いまからちょうど、11年前になる。こうして、「チーバくん」は、すっかり定着した。

▼「チーバくん」は千葉県の地図

チーバくんは、図2のように千葉県地図のカタチになっている。その地形をマスコットに仕立てたのは、まさに坂崎氏の慧眼である。さすがに動物イラストレーターである。手と足をつけ、さらに耳、目、鼻、口、舌と部品化して表情ある生きものに仕上げられている（デザインされている）。

このチーバくんは、地図に由来したが、3D化され、左向きにもなり、正面にも背面にもなり、動作が生まれた。結果、千葉県のマスコットとして観光案内、イベント紹介、千葉産品PR、環境活動紹介（緑のカーテン育成、新しい生活様式等々）、SNSサイト（フェイスブック、ツイッター、インスタグラム）などとして発信している。もはや千葉県の顔であり、なくてはならないマスコットキャラクターである。

▼筆者の関わり ―チーバくんの田んぼ

筆者は、千葉県いすみ市に住んでいるが、その位置をチーバくんで示せば、左手首に当たる。太平洋に面しており、外房と呼ばれる。JRの路線名も「外房線」となっている。平成17年（2005年）の合併前には、夷隅郡岬町といわれており、名前の通り太東埼灯台がある岬であった。現在は、いすみ市岬町となっている。

その地は、太平洋から昇る朝日ではじまり、潮騒が聞こえ、夜には灯台の灯火が回転する。海岸と千葉県一の流域面積の夷隅川の河口である風光明媚な海里&川里である。いま、その沖合には「洋上風力発電」の設置案が話題となっている。コロナ禍の中、新橋の事務所から岬町の我が家でテレワークすることが多くなり、職住が一体となった。筆者は、畑と田んぼを借りて趣味の農業を行っており、その世話もあり、さらに地元での毎月のボランティア活動（アドバカシー）もあり、すっかり滞在日数が多くなった。地元や千葉県についての愛着に基づくが、いっそう深まった。

▼アート&デザイン

自然と関わって生きる人間。その他の動物や生物、さらには地勢にも影響を及ぼして生きて来た人間が、新型ウイルスによる猛攻に地球全体において、人間の生き方を変容せざるを得ない状況となっている。筆者は、「自然と至然」という言葉で、人間の生き方への修正を明示している。カルチャーショックという言葉があり、変革をつくってきたが、同じくネイチャーショックという言葉で、生き方への変革が必要である。

その表象として、昨年は「田んぼアート」としてのデザインを試みた。最初に、「岬町」という文字のアート&デザインで田んぼ&稲作として行った。それは、本紙にも紹介した【**註4**】。「岬町」の文字を分解し、「山」「甲」「田」「丁」のカタチに田んぼのカタチにし、コシヒカリを田植えし、稔りを迎え、稲刈りをし、毎日のご飯として食した。その、脱穀と籾摺りは、千葉県の農業普及指導センター（大多喜町）の農器具を借りて行うことが出来た。

なお、グーグルマップの航空写真には、「岬町」がくっきりと写されている（**図3**）。

図3：Googleマップに記録された「岬町」

▼「チーバくんの田んぼ」

今年のアート&デザインは、田んぼのカタチを千葉県の地図の外形にした。すると、「チーバくん」のカタチになる。チーバくんのイラストをプリントアウトし、これを拡大し田んぼの畔を作った。具体的には、東西11㍍、南北17㍍とした。

昨年の「岬町」の田んぼの場所であり、新たに開墾もして、すっかり田んぼをつくり直し、「チーバくんのカタチに似せた田んぼとした（以下、「チーバくんの田んぼ」と略称）。

田植えから、時間経過とともに緑が濃くなり、黄金の稔りを迎え、稲刈りまでの月日の変化を、写真で示す（**図4**）。

既述したように、岬町の沖合では、洋上風力発電の計画があり、「チーバくんの田んぼ」では、いすみ市の沖合にあたる地面には、千葉県農業普及指導センターが薦める「パンパスグラス」（樹高が1～3㍍となる銀色の花穂となるススキの一種）を、洋上風力の風車に見立てて10株を植えた。時代を先取りした「アート&デザイン」である。

▼まとめ

私たちの暮らしは日々変化が求められる。それは世界情勢にもよるが、私たち自身の立場でもある。洋上風力などの再生可能エネルギーへのシフトは、気候変動に対するアプローチでもある。そのためには、その社会受容性が求められる。「チーバくんの田んぼ」には、その中央に、垂直軸の風車も設置してあり、風車の社会受容性のための「その世」を具現化している【**註5**】。

図4：「チーバくんの田んぼ」の月日変化

【＊】イラスト使用　千葉県許諾2473-1号

【**註1**】千葉県HP（チーバくんの広場）https://www.pref.chiba.lg.jp/kouhou/miryoku/chi-ba-kun/index.html

【**註2**】千葉日報オンライン「自分より長生きして チーバくんの生みの親・坂崎千春さん」https://www.chibanippo.co.jp/news/local/415583

【**註3**】ウキペディア「チーバくん」https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%81%E3%83%BC%E3%83%90%E3%81%8F%E3%82%93

【**註4**】『新エネルギー新聞』（第157／158号、2020年5月4日／11日発行、11面、「Stayinghome」）http://www.kofuza.jp/images/nen_2020_32.pdf

【**註5**】佐藤建吉、「社会受容性という環境問題」（環境倫理の基礎講座）、『環境管理』（2021年4月号、Vol. 57, No. 4）http://www.kofuza.jp/images/kanri_2021_4.pdf